

主 題：パウロのあいさつ  
聖書箇所：ピリピ人への手紙 1章1-2節

命題：私たちは神様のものであり、神の民として生きる

皆さんと一緒に神を礼拝できることを感謝します。礼拝を通して神のすばらしさが現わされることを願い、また神様をあがめたいと思います。

まず神様のみことば、ピリピ人への手紙1：1-2をお読みしたいと思います。

ピリピ1：1-2

「1 キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。2 どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。」

この1-2節で書かれているのはパウロのあいさつです。パウロとテモテからピリピの教会に宛てた手紙ですが、この中でパウロは自分が神の前にどのような者であるかを明らかにしています。私たちにとって、自分が神の前にどのような者であるかをわきまえ、心得ているのはとても大切なことです。それをわきまえ、心得ていれば、私たちはそのとおりに積極的に生きていくことができますからです。私たちが神の前に一体どのような者であるのか、きょうテキストから教えてもらえるメッセージの命題は、私たちが神のものであるということです。私たちは神が創造され、神に選ばれて主イエス・キリストの十字架の死と復活を信じる信仰によって救いにあずかりました。救われた私たちひとりひとりが神のものであり、神の民として新しい人生を生きる者、クリスチャンとされました。しかし、もし私たちが神の前に自分が神のものであるということを十分にわきまえ、心得ていないとしたら、一体どのような生き方をするか、どういう問題が起こるか考えてみてください。自分が神のものであるということをはっきりと心得ていない者は、自分が神のものであるという確信を持って生きていくことができません。自分の心の中に自分が神のものであるという思いがなければ、神に喜ばれる生き方をしたい、神様を愛して神のすばらしさを現わす生き方をしていきたいという生き方が難しくなります。自分が神のもの、神の民であるという確信を持って積極的に毎日を生きていくことができないのです。例えばあなたが大切な人生の判断をしないといけない時があるとします。自分の進路でどんな学校に行くか、どのような仕事につくか、結婚して神様に喜ばれる家庭を持つのか、それとも独身で神様のすばらしい栄光を現すために生きていくのか、家庭において子育ての問題がある時など、いろいろな判断を要求される時に、私が救ってくださった神様のものであり、神の民として生きるということを知っている人は、単に自分自身の考えや価値判断でそれを決めることはしません。自分が神のもの、神の民であるゆえに神を愛して、何が神に喜ばれるのかを考えようとします。神様のみことばから教えられて、神様のみことばに従いたいと願います。この世の考え方と調子を合わせたり、周りの教えによって揺らぐことがないのです。

一方で聖書は、神を信じない人についてピリピ3：19で「彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」と語ります。聖書が教えてくれるのは、神を信じない人の神は「彼らの欲望」であり、自分の思うまま、欲望のままに生きているということです。私たちもかつてはそのような生き方をしていたのですが、救われた私たちは新しい神のみことばという基準に従って生きていこうとします。このように私たちにとって自分が神のものであることをわきまえ、心得ることはとても大切なことです。パウロは自分が神のものであることをよくわきまえ、心得ていました。そして神のもの、神の民として新しい人生を生きました。そんな神に喜ばれる、神に忠実に生きる生き方をあなたもしたいと願いませんか？本日のテキストは私たちが神のものであるということについて四つのポイントを教えてくれてあります。一緒に見て行きましょう。

1. キリスト・イエスの奴隷とされた者

ピリピ1：1で「キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから」とパウロは手紙を始めています。この「キリスト・イエスのしもべ」の「しもべ」は「奴隷」という意味です。私たちが神のものである一つ目のポイントは、「キリスト・イエス」の奴隷とされた者です。この奴隷（デューロス）ということばは聖書に130回以上出てきます。もともとは「縛る」という意味から派生していて、辞書では「仕える」とか「従属している」、「王の召使い」などの意味が出てきます。この“デューロス”ということばは純粋に奴隷を意味していて、個人的な自由や権利、自分の所有物を持たない、人に仕える存在

であることを意味します。この奴隷という表現は私たちにとっては余りなじみがなく、身近なものではありません。私たちの今住んでいる社会の中には身分的な奴隷制度はありませんし、普段私たちが奴隷を目にすることもないでしょう。しかしパウロが手紙を書いたピリピの町では奴隷は日常的な身近にいる存在でした。ピリピの町の人々にとって、奴隷と言われると、あななるほど奴隷という立場なのだとはっきり理解されるほど奴隷は普段から見かけられ、また人々の日常生活で身近なものでした。パウロの手紙の中でも、ピレモンへの手紙にはオネシモという奴隷が登場しますし、またエペソの手紙でも、コリントの手紙の中でも奴隷たちがいたことを私たちは知ります。

また、ピリピがどのような町であったのかを思い出していただくために、レジメの裏にある地図をご覧ください。ピリピの町は地図の上の方に「地図23」と書いてある下にマケドニヤとトラキヤという地名があって、その真ん中にあります。ちょうどエーゲ海の北に当たり、ここは非常に大事な土地の一つでした。なぜかと言いますと、ヨーロッパからアジアに抜けるために必ず通らなければいけない大切な道路がここを通過していたのです。そして丘陵地帯であって軍事的にも非常に戦略価値が高い土地でした。また、アレキサンダー大王のお父さんのピリポスがこの町を建設したところからピリピという町の名前がつけました。ピリピからさらに左側にたどっていくと、長靴のような形をしたイタリアがあります。ピリピから近いところにあるイタリアには、当時の強国であったローマがありました。そしてピリピの町もこのローマの支配下にあります。ルカは、ここはマケドニヤ地方第一の町で、植民都市であったと言いました。バークレーによると、ローマの植民地にはローマの徴兵制でローマ市民権を持った人たちが大勢駐留しており、その町の治安を維持していました。そして彼らは、ローマ市民として生きることが誇りだったのです。ですから、パウロとシラスがピリピの町で投獄された時も、「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」(使徒16:20-21)と訴えられたことをルカが記しています。

当時ローマが支配していたこの社会の中には大勢の奴隷たちがいました。最近の研究では、自由人の数に対して奴隷の数は3倍である1:3、イタリアには約200万人の奴隷たちがいたということがわかっています。当時、身分をはっきりさせるために奴隷と自由人の衣服を分けようと言ったセネカという学者の意見に対して、自分たちの衣服の様子を見て、奴隷がどれほど多いのかがわかった時に、奴隷たちがローマに対して反乱を起こすといけなから止めたという記録が残っています。ピリピの町でパウロとシラスが捕えられたきっかけも若い女の奴隷から占いの霊を追い出したことがきっかけでした。このように、ピリピの町の人々にとって、奴隷というのは非常に身近な存在でした。パウロはローマ市民であることを誇りとするピリピの町の人たちに、あえて自分が奴隷であると自己紹介をしたのです。奴隷は主人の所有物であり、主人の命令に従う者です。この奴隷という表現を使ったのはパウロだけではありません。ペテロもⅡペテロ1:1で「イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから」と自分の紹介に対して奴隷という表現を用いました。また、イエス・キリストの兄弟、正確にはイエス・キリストの誕生の後にヨセフとマリアから生まれた子供であるヤコブとユダの手紙のあいさつにも奴隷という表現が使われています。

なぜこのような表現を使ったのでしょうか？皆さんの中には奴隷という表現を聞いたら嫌だなとか、昔の制度だと思える人もおられるかもしれませんが。この奴隷ということばでは当然主人に焦点が当たります。奴隷には仕えるべき主人がいるのです。パウロは「キリスト・イエスのしもべ」、奴隷であると言いました。パウロの主人は「キリスト・イエス」でした。ピリピ1:1の中に、「キリスト・イエス」ということばが2回出てきます。パウロは救いを与えてくださった油注がれた者、神が備えてくださった救い主「キリスト・イエス」こそが私の主人であり、私の仕えるべきお方であり、私は「キリスト・イエス」に仕える奴隷であることを強調して語ったことがわかります。パウロが「キリスト・イエス」に仕えた姿は、使徒20:19でミレトからエペソの長老たちを呼んで別れのあいさつをする中で「私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。」と書いています。この最後に出てきた「主に仕えました」ということばが奴隷、「デューロス」の動詞形です。パウロが「謙遜の限りを尽くし」て主に仕え続けたことがわかります。パウロもペテロもヤコブもユダもみな自分を救ってくださった救い主「キリスト・イエス」の奴隷として仕えたのです。そして救いをいただいた私たちクリスチャンのすべてが神様のものとされた者、「キリスト・イエス」のしもべ、奴隷であり、主に仕える者なのです。

とても大切なところなので、この「キリスト・イエス」の奴隷についてももう少し丁寧に見ていきたいと思えます。この「キリスト・イエス」の奴隷という表現から私たちは三つ教えられることがあります。

### 1) 新しい信仰

一つ目に教えられることは、私たちは新しい信仰を与えられた者だということです。

### ① 救われた者はイエスを主と告白して生きる ローマ10：9-10

なぜなら救い主イエス・キリストを信じ、イエス・キリストを主とする者は、私の主はイエス・キリストであると告白して生きる者だからです。ローマ10：9-10に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」と書いてあります。聖書が示すとおり、私たちはイエス・キリストが自分の罪のために十字架で代価を払って死んでくださり、復活してくださったことを「心に信じて義と認められ」ました。神の前に正しい者、罪赦された者とされたのです。そして聖書に「口で告白して救われる」とあるように、イエス・キリストが自分の主であることを告白して生きていきます。この「口で告白して救われる」ということは現在形で書かれていて、私たちが一度して終わりというのではなく、私たちが生きていく限り、ずっと自分の主がイエス・キリストであるということを告白するという意味があります。この「告白」というのは、拒まずに誓うとか、拒まずに告白する、公のところで明言するという意味です。イエス・キリストが私の主ですと告白する生き方が私たちの新しい信仰であるということです。私たちは、この新しい信仰を持って生きる、神のものとされた「キリスト・イエス」の奴隷なのだということです。

### ② キリストのために生きる ローマ14：7-9、Ⅱコリント5：15

また、キリストのために生きる者でもあります。ローマ14：7-8では、「私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」と聖書は書いています。私たちは主のために生きるのだと。Ⅱコリント5：15でも「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」とあります。「キリスト・イエス」の奴隷は、イエス・キリストが自分の主であると告白する新しい信仰を持つ者であり、そして主のために生きる者と聖書は教えてくれます。

### ③ 神の栄光を現わすために生きる Iコリント6：20

私たちが主のために生きるのは、私たちが主の栄光を現すためです。「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」と、Iコリント6：20に書かれています。「キリスト・イエス」の奴隷、私たちは新しい信仰を持つ者であり、神の栄光を現すために「キリスト・イエス」のために生きる者です。

私たちはイエス・キリストの奴隷として、新しい信仰を告白し、私たちの主が「キリスト・イエス」なのだ、私はこの主のために生きるのだ、そして主の栄光が現されるために生きているのだというこれら点について、皆さんは周りの人たちに明らかにされているでしょうか？当時のアンテオケの教会で、町の人たちが弟子たちをあなたは「キリスト者」ですと初めて呼びました。クリスチャンが自分自身で「私はクリスチャンです」と言い広めたわけではありません。もちろん彼らも伝道はしたでしょう。しかし、町の人々が彼らの生き方を見た時に、「キリスト・イエス」の奴隷として生きる新しい信仰を見ることができたのです。私たちも「キリスト・イエス」の奴隷として新しい信仰を持って生きることをあかししていきたいですね。

## 2) 新しい従順

二つ目に「キリスト・イエス」の奴隷として教えられることは、新しい従順です。私たちは主である「キリスト・イエス」に従い、神の命令に謙遜に、絶対的に従う者です。聖書は私たちがかつては罪の奴隷であり、悪魔の支配下にあり、神の御怒りを受ける、永遠の滅びに至る者であったことを教えています。しかし、救われた私たちは新しい主人である神に新しい従順をもって仕える者とされたのです。ローマ6：16-19でパウロはこのように言っています。「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」と書かれています。私たち「キリスト・イエス」の奴隷とされた者は「罪の奴隷」ではなく、「義の奴隷」です。そして罪から解放された神の支配下にある、神の「教えの規準」に従順に従う奴隷とされました。

また、永遠のいのちを持つ者とされました。自分を捨てて、主人の願いや命令を守ることを生きがいとする新しい従順が「キリスト・イエス」の奴隷の生きる姿です。この“デューロス”、奴隷ということばはしもべ、仕えるという意味もありますが、ピリピ2：7では「仕える者の姿をとり」と、私たちの模

範であるイエス・キリストについて使われています。イエス・キリストが私たちの罪のために神としてのあり方を捨てられないとは考えず、「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられ…人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われ」ましたとあります。「キリスト・イエス」の奴隷の模範はイエス・キリストです。十字架の死にまでもキリストが神に従順であられたように、私たちも神に従順に生きる者とされたのです。私たちはイエス・キリストが従われたように、「キリスト・イエス」の奴隷として神の命令に謙遜に、絶対的に従おうとしている者でしょうか？この罪について軽く考えることはないでしょうか？

思い出していただきたいのは、神への不従順、的外れな生き方、罪の結果です。アダムがエデンの園で罪を犯し、神の命令に不従順だったのはたった一度です。しかし、アダムが犯した罪の結果として、アダムだけではなく全人類に死をもたらし、世界に罪の影響は及びました。私たちはこの神様の前に一体どれだけ罪を犯しているのでしょうか？私たちは不従順な態度ではなく、「キリスト・イエス」の奴隷として謙遜に、絶対的に神の命令に従順に生きようとする必要があります。奴隷には自分の考えではなく、主人の喜ぶことをしていく必要があります。謙遜に、絶対的に神の命令に従順に生きようとするのが必要なのです。主人の命令に忠実に生きることが求められ、主人の喜ぶことを喜びとします。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」とマタイ7：21に書かれてあるとおり、新しい従順を与えられた者として、私たちは神のみこころを行い、従い続けていきましょう。

### 3) 新しい愛

さて、「キリスト・イエス」の奴隷として三つ目に教えられることは新しい愛です。ピリピ1：9-11を通して、パウロは「キリスト・イエス」の奴隷に与えられた新しい愛について、実は愛が神の栄光と誉れを現わす動機であると語りました。パウロの祈りがこう記されています。「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。」、書かれていることを簡潔にまとめると、神について私たちが深く知って、どんなにすばらしい救いと神様のみわざが私たちになされたのかを理解する者はいよいよ深く神様を愛し、私たちのうちの「愛」が増える、そしてその神様を愛する「愛」が動機となって、神に喜ばれることを見分け、神の栄光を現す行き方をするとということです。この「愛」はアガペーの愛で、神によって与えられ聖霊なる神様によって私たちのうちに注がれ続けている愛です。またこの「愛」は感情ではなく、意思を持って自発的に神様に従っていく愛です。

私たち「キリスト・イエス」の奴隷は、新しい愛を持って神に仕える者とされました。嫌々ながらでなく、だれかに強制されてでもなく、イエス・キリストを心から愛するゆえに喜んで仕えていきたい、これが「キリスト・イエス」の奴隷としての願いです。イエス・キリストが弟子を招かれた時に、イエス・キリストは自分の両親、家族、また自分のいのち以上に、イエス・キリストは何者よりも私を愛しなさいと言われました。私たちにとってイエス・キリストの優先順位は一番です。まさに同じピリピ1：20-21でパウロが自分のことばと行いのすべてを通して、生きるにも死ぬにもその生き方そのものによってキリストのすばらしさがあがめられることを願ったのです。「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」とあるとおり、パウロにとってイエス・キリストがすべてでした。イエス様が私たちにとって本当に一番大切なもの、最も優先されるものになっているのでしょうか？

例えばしないといけないことがたくさんある中で、私たちがイエス・キリストを愛するゆえに、イエス・キリストを最優先にしたいと願い、判断しておられるのでしょうか？イエス・キリストは私たちのためにいのちを捨ててくださいました。最高の愛をもって私たちを愛してくださいました。私たちはその神様の愛どのようにこたえていくのでしょうか？ゴスペルの歌詞の一つで「命を捨てて愛を示されたイエス様に出会いすべてが変わった 私はあなたに何をもって感謝を表せばいいのだろう」とありますが、私たちはこのイエス・キリストの愛に一体どのような愛でこたえていくのでしょうか？私たちはどのような愛でお仕えしているのでしょうか？福音子ども賛美歌でも「小さい私の手は 神様の喜ぶ仕事をするためにある 私のすべてはイエス様のもの 十字架で死なれたイエス様のもの」というのがあります。子どもでも大人でも、救われた者はみな神から与えられたこの新しい愛で主にお仕えします。

「キリスト・イエス」の奴隷は、神から新しい愛が与えられた者であり、新しい愛を動機として私たちの主イエス・キリストに仕える奴隷なのです。

「キリスト・イエス」の奴隷であることについて三つ見てきました。新しい信仰、新しい従順、新しい愛を持って生きる者であり、私たちは神のもの、また救い主イエス・キリストのものでした。

## 2. キリスト・イエスにあって聖徒とされた者

さて、神のものとされた私たちの二つ目のポイントは、「キリスト・イエス」にあって「聖徒」とされた者です。ピリピ1：1を見ると、「ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。」と書いています。この「すべての」ということばは救いをいただいたすべてのクリスチャンが例外なく「聖徒」であるということです。つまり救われたあなたがキリスト・イエスの「聖徒」なのだということです。この「聖徒」ということばは“ハギオス”ということばです。「聖別された」とか、「聖なる」、「正しい」、「清い」という意味です。

ここで「聖徒」ということについて二つのことを考えてみたいと思います。

### 1) 罪から分離すること ローマ12：1

一つ目は罪から分離することです。「聖徒」と訳される“ハギオス”ということばは旧約聖書において「分離」を意味しました。ヘブル語の“カドシュ”という単語と同義語で「他の物と異なっている」ということを意味することばです。例えば祭司についてレビ21：6で「彼らは自分の神に対して聖でなければならぬ。」とあります。祭司はほかの人々と異なり、神のために取り分けられ、分離し、神様にお仕えする者でした。また神殿の中の聖所に対して使われることばでもあります。つまり神殿の中でもほかと違う、異なって神のために分離し、取り分けられた特別なところでした。つまりこの「聖徒」ということばは、神によって選び出されて救われて、神のために生きる者とされた神の民だということです。私たちが「聖徒」だという時に、私たちが神様のものであり、神様の民であるということなのです。私たちが神様のために仕える神の民として生きる者であることがわかります。日本語の聖書にはそこまですましく訳されていないのですが、「キリスト・イエス」のうちにあるとか、「キリスト・イエス」の中に入れられた「聖徒」という意味の“エン”という前置詞が置かれています。私たちが「キリスト・イエス」に属する者とされたということがわかります。新共同訳聖書などでは「キリストに結ばれた」という訳がされています。私たちは罪から分離されて、イエス・キリストに固く結びついて一つとされた者です。それゆえに私たちはローマ12：2にあるように、この世と調子を合わせるのではなく、神のみこころが何かをみことばから教えられ、聖霊の助けをいただきつつ神に従って生きていくことができる者なのです。

### 2) 神の前に聖くされること

二つ目に、この“ハギオス”、「聖徒」ということについて私たちが教えられるのは、神の前に聖くされるということです。私たちは単に罪から救われただけでなく、自分自身を聖い生きた供え物として神に捧げて生きる者です。ローマ12：1のところで、この“ハギオス”、聖なるということばは、「聖い」と訳されています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」とあります。この中で用いられている「聖い」ということばが“ハギオス”です。私たちは自分自身そのものを聖い生きた供え物として神様にお捧げして生きることが道理にかなった、合理的な、私たち人間が当然神に対してなすべき礼拝であると聖書は教えています。それゆえに「聖徒」は神のものであり、神の民です。パウロはピリピ1：6でも神がこの「聖徒」のうちにより働きをなし、完了させてくださることを記していますし、また神は「聖徒」のうちに、神のご厚意によってよい神様の心に従って神のみこころをしたいという決心をさせてくださり、またそのことを行う力をも与えてくださることを記しています。また、うちに与えられる神様の力によって強くされ、毎日を生きていくことができる、そのような者が「聖徒」であると教えてくれています。私たちは神のものであり、「キリスト・イエス」にあって今を生きる「聖徒」なのです。自分が「聖徒」であるということについて普段考えたことがあるでしょうか？自分自身が罪から分けられ、神様のために特別に今生かされている「聖徒」なのだ、そして神様の民として、「聖い」者として今私たちが生きることこそが神のみこころなのだ。そんな私たちとともに神様がおられ、私たちのうちに力強く働く神の力によって私たちは生かされている。これこそが私たち今「キリスト・イエス」の「聖徒」とされた者の祝福です。

## 3. 神と親密な関係を持つ者

さて、ピリピ1：2でパウロは「どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。」と述べました。「私たちの父なる神」と「主イエス・キリスト」という二つのことばが出てきています。順に見ていきたいと思います。実はこのことを通して、三つ目、私たちは神様にあって救われ、神と親密な関係を持つ者だということをお教えられます。

## 1) 私たちの父なる神

一つ目は「私たちの父なる神」です。まず私たちが「私たちの父なる神」と呼ぶのは私たちの神を「父なる神」とするからです。

### ① 私たちは神の子とされた ヨハネ 1 : 1 2

私たちは単に神様とはいいません。私たちは父なる神様と呼びます。父に権威があり、私たちは神の子とされた者だからです。ヨハネ 1 : 1 2には「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とあります。イエス・キリストを主であると信じ、救われた私たちは神の子どもとされる特権を与えられました。それゆえに私たちは神の子とされた者です。また父親が家族をよく知り、家族をよく愛し、その必要を知って、神のみことばの基準に基づいてリードし、導くように、神は私たちをよく知ってください、愛してください、みことばで導きを与え続けてくださるのです。むしろ神が私たちを愛し、よく知ってください、みことばで導いてくださるその様子のおりに、父親は神の模範にならって家族をリードしようとするのです。この神と私たちとの個人的な、親密な関係は私たちにとっての祝福です。私たちはこの神と親密な関係を持つ者とされました。私たちはいつでも神に祈ることができますし、神のことばを目にし、読むことができます。私たちは心の中に置かれた神のことばに従うことができます。父なる神に信頼を持って祈り、神様のみことばを聞くのです。なぜなら神が神の子とされた者に対して、神のみことばのおりに必ず祈りにこたえてくださると、信頼できる神様のみことばに書いてあるからです。私たちの願うことではなく、神のみことばがよいことであり、最善であり、神様のみことばがなされるからです。

### ② 神を愛して命令に従う 申 6 : 4-5・I ヨハネ 5 : 3、3 : 2 3

また二つ目に、私たちは神を愛して命令に従います。神を「父なる神」と呼ぶ者は神の子どもです。そして子どもには親に従うという責任があります。私たち神の子とされた者は、神を愛するゆえに自発的にみずからの意思をもって喜んで神の命令に従います。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさいという命令のおり自分のすべてをもって神を愛して従おうとします。またその命令は、神を愛して喜んで自発的に従うゆえにあなたにとって重荷とはならないのです。私たちはこのような神と親密な関係を持つ者とされました。

## 2) 主イエス・キリスト

次に、みことばに書かれている「主イエス・キリスト」です。この「主」、「キュリオス」ということばは「主人」とか「オーナー」、「君主」という意味です。私たちの主人が「イエス・キリスト」であり、私たちは「主イエス・キリスト」のもの、神のものです。1節で、すでに私たちは救われた者が「キリスト・イエス」の奴隷であることを見てきました。ただ特にここで見ていただきたいことがあります。それは2節の「父なる神」と「イエス・キリスト」が並列で書かれていることです。ユダヤ人であるパウロが「父なる神」と並列に書くのは、神以外の何物でもありません。「主イエス・キリスト」こそが子なる神であり、私たちの主であり、私たちは神と親密な関係を持つ者、神のものとされた者なのです。2節でパウロは「私たちの」と書いています。皆さんにとって、あなたの神、私の神がこの「父なる神」であり、また「主イエス・キリスト」です。この親密な関係を毎日の信仰生活の中で喜びとし、神との交わりを楽しんでおられるでしょうか？

## 4. 神から恵みと平安が与えられている者

さて、2節で私たちは神のものであるということについて教えられる四つ目のポイントがあります。それは神から「恵みと平安」が与えられている者です。

### 1) 恵み

#### ① 受けるに値しない者に与えられる神からの贈り物

まずこの「カリス」という「恵み」は、本来受けるに値しない者に与えられる神様からの贈り物、プレゼントです。私たちが何かよいことをしたから神様からご褒美をいただいたのではありません。すべて神様のご厚意によって贈られたプレゼントだということです。本来私たちは救われる前に創造主である神に反抗し、罪を犯して神様に逆らう者でした。私たちの当然受けるべきは神のさばきであり、永遠の滅びでした。私たちは何の言い訳をすることもなく滅んで当然の者でした。しかし、神が一方的な「恵み」を与えてくださった。これが「恵み」なのです。

#### ② 救われて神に従うために与えられる神からの贈り物

また、この「恵み」とは私たちが救われて神に従うために与えられる神からの贈り物です。この「恵み」は私たちの罪の赦しを思い起こさせてくれます。「恵み」の動詞の形は「恩恵を授ける」とか、「寛大に赦す」という意味です。私たちが神からの罪を赦していただく、救いをいただいたことはただ神様

からの「恵み」であり、神様からのプレゼントです。またパウロは自分の働きについて、この「恵み」ということばを用いました。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」とⅠコリント15：10で語りました。私たちが神に従い、神にあって働きをなすことも神様の「恵み」です。むしろ私たちを通して神様の「恵み」が働きをなし、神様の栄光を現してくださるのです。私たちはこの「恵み」を神様から与えられている者として今生かされています。

## 2) 平安 ガラテヤ5：22 御霊の実

最後に、このテキストの教えてくれることは「平安」です。私たちは「恵みと平安」を神から与えられた者です。「恵み」も「平安」も実は単数形で書かれています。単数というのは一つです。他にたくさんあるわけではありません。神から与えられる「平安」がただ一つ私たちに与えられているということがわかります。なぜならこの「平安」は御霊の実であるからです。この“エイレイネ”という「平安」は「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」とあるとおり、ガラテヤ5：22-23では「平安」が聖霊なる神様によって与えられる御霊の実であることを私たちは知ります。私たち救われた者に与えられる「聖徒」の特徴です。私たちは神から「平安」を与えられた者です。それは私たちのうちにおられる聖霊なる神様が私たちに与えてくださる「平安」だということです。つまり神だけが与えることのできる「平安」を私たちは持って生きることができるのです。イエス・キリストが十字架にかかれる前に、「あなたがたは心を騒がしてはなりません。」(ヨハネ14：1、27)と言われました。なぜか——。私たちは平和を持って生きることができる者とされたからです。どんな時でも、どんなところでも、どんな状況の中にあっても、私たちのうちにあるすべてのものをこの「平安」が守ってくれるということのみことばから教えられて、私たちは知っています。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」、主語は「神の平安が」、述語は「守ってくれます」、「あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」とピリピ4：6-7に出てきます。神に信頼して生きる者の心を、神の「平安」が守ってくれるのだというのが神の約束です。

迫害の中にいたピリピの「聖徒」たちがどれほど勇気づけられたことかと思いませんか？また私たちも今の毎日の中にあつていろいろな経験をします。よいことばかりではなく、私たちにとって辛いこと、悲しいこと、私たちが落胆するような中であつて、私たちは神によって与えられる「平安」を持って生きることが許されています。私たちがいつもともにいてくださる神を信頼し、神のみことばと聖霊なる神の助けをいただいていつも「平安」を持って満たされて生きることができるのは感謝なことです。私たちは神のものであり、この「平安」を神からいただいた者です。すでにお気づきかもしれませんが、実はこの2節の中で、私たちは「父なる神」と子なる神「主イエス・キリスト」と御霊の実を与えてくださり、「平安」を与えてくださる聖霊なる神が私たちの神であることを知ります。私たちの神は唯一まことの神、三位一体のまことの神です。

### まとめ

さて、救われたクリスチャンは神のものであります。神が創造され、選ばれて、主イエス・キリストの十字架の死と復活によって救いにあずかった私たちは、神のものとして新しく生きていきます。神の前に新しくされたあなたはどんな生き方をされていますか？ご自分が神の前にどのようなものであるかを心得ておられたでしょうか？どうかいま一度かつて救われる前の私たちがどのようなであったかを思い出してください。私たちは神の前に罪を犯し、神に反抗し、ただ神のさばきを受けるにふさわしい者でした。私たちは自分が死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている者でした。しかし、ご覧いただいたように、神の一方的な愛と恵みによって私たちはその罪が赦され、私たちの救い主イエス・キリストを信じる信仰によって今生かされています。私たちは「キリスト・イエス」の奴隷、「キリスト・イエス」にある「聖徒」であり、神と親密な関係を持ち、神から「恵みと平安」が与えられている者として生きています。幸いなことではないでしょうか？新しい生き方ができることを感謝しないでしょうか？

今ちょうどオリンピックが開催されていますが、少し前の映画ですが、“炎のランナー”というオリンピックを題材にした映画があります。私たちが自分が神のものであるということについて考えさせられる映画です。今から約100年ほど前、1924年のパリオリンピックで実際に活躍した2人のランナーをモデルとした映画です。2人ともオリンピックの陸上競技に出場し、レースに優勝して金メダルをもらうのですが、その2人の走る目的は異なったものでした。主人公のひとりであるハロルド・エイ

ブラハムスという人はユダヤ人で、自分自身と国家のために走ります。実在したエイブラハムスという人物は他国のランナーに負けることがないように何でもするという考え方で、プロのコーチを雇い、オリンピックのアマチュアリズムを大切にする当時のケンブリッジ大学の関係者から批判がありましたが、自分の勝利のために努力した人です。周りの人たちからは自分の勝利のためには手段を問わないというような受け取られ方をした人です。一方で、もうひとりの主人公であるエリック・リデルという人は、神のすばらしさが現わされることを願ってレースに臨みました。宣教師の息子で、彼自身も宣教師となるのですが、神が速く走ることのできる足を与えてくださったことを感謝したのです。彼がレースに出たわけは、人が集まった時にそこで伝道ができ、神様のことについて語る機会があったからです。彼がレースに出た目的は、彼のレースを通して神のすばらしさ、誉れ、また神の栄光が現されるためでした。彼にとって神のために走ることが喜びだったのです。実在した人物も400メートル走に出場して優勝し、当時の世界新記録となりました。このエリック・リデルという人物はオリンピックの翌年に中国の天津に宣教師として渡ります。そして日本軍に捕えられて抑留され、脳腫瘍でこの世を去ります。彼の人生は自分が神のものであることをよくわきまえ、心得た生き方でした。なぜなら彼が神の喜ばれること、神の栄光のために生きることが願って生きたことがわかるからです。彼が生涯のレースを走り通した姿は世の人々に対してはっきりとあかししているからです。

神は私たちにどのようなあかしの機会、どのような信仰生活の日々を備えてくださっているのでしょうか？今の私たちにはわからないかもしれませんが、でも今ここで私たちはそのために生かされているのです。神のご計画があり、神に信頼して神とともに歩めることは幸いなことです。一緒にあなたは「キリスト・イエス」の奴隷、「キリスト・イエス」にある「聖徒」であり、神と親密な関係を持ち、神から「恵みと平安」が与えられている者ということを見てきました。神と神のものとした新しい人生を神様に感謝して主にお仕えしていきましょう。